日本語初級学習者の習得過程に関する縦断研究
－　疑問表現と応答表現について　－

久保田美子

要　　旨

本研究は、英語を母語とする２名の日本語初級学習者を対象とした、疑問・応答表現の習得に関する縦断研究である。１年１ケ月の調査期間中、疑問表現は、文末に助詞「か」を添えた形だけではなく「～も？[注1]」「～の？」等、文を完結せずに助詞の直後で切り、音調を上げる形式の疑問文の使用もみられるようになった。Yes-No疑問文に対する応答では、疑問文中のことばを繰返す形が多く、否定の応答詞「いいえ」の使用が少なかった。説明を要求する疑問（Ｗｈ疑問文）に対する応答では、その平均文節数の増加がみられた。

［キーワード］　習得過程の縦断研究　初級学習者　疑問表現　応答詞

Ⅰ．はじめに

疑問文は日本語学習のごく初期の段階で導入され、それに対する応答と共に指導される。本論文は、そうした疑問、応答の表現を日本語初級学習者が実際にはどのようにして習得していくのかを縦断的に調査、研究したものである。

本研究の対象学習者は、英語を母語とする２名の成人であり、1991年８月の来日直後から日本語の学習を開始している。１名（学習者Ａ）は女性で高校の英語教師、もう１名（学習者Ｂ）は男性で技術者である[注2]。

両名には1991年10月から翌年の10月まで、１年１カ月の間、授業（計159 時間）と同時に19種類の対話形式のタスクを課した。本論文はその発話資料をもとに分析したものである。

Ⅱ．疑問表現の習得

疑問表現は、『日本文法大辞典』（明治書院）、『国語学大辞典』（東京堂出版）[注3]の記述によれば、その言語形式上、（１）文末の音調を上げる、（２）

文末に助詞「か」を添える、（3）文中に疑問詞を用いる、の3要素のうち1つ以上をもつものとされている。本論文で扱う疑問表現もこの記述に従う。

また、疑問表現は、相手に問いかけて答えを要求するものであるが、相手からどのような答えを引き出そうとするかによって次の3つの場合に分けられる。

1)判定を要求する場合　（例）「がくせいですか。」

相手側に肯定か否定のどちらかの答えを求めるもので、以下　Yes-No疑問文と呼ぶ。

2)選択を要求する場合　（例）「おおきいですか、ちいさいですか。」

以下、選択疑問文と呼ぶ。

3)説明を要求する場合　（例）「おくにはどちらですか。」

疑問詞を含む疑問文が使われる。以下、Wh疑問文と呼ぶ。

本論文では、この分類に沿って各々の疑問表現の習得について考察する。尚、「おくにはどちらですか。」の代わりに、「おくには？」という形の疑問表現を使う場合がある。これは、上記の分類では、3)に含まれるが、この他にも「～は？」といった形をとって、2)、3)、どちらの分類に属するかはっきりしないものもあるため、こうした「～は？」の形の疑問表現は、まとめて、1)2)3)とは独立した項目として取り上げることにした。

また、調査期間中に授業で導入した「行きましょうか」（勧誘）、「窓を明けていただけませんか」（依頼）、「そうですか。↘」（応答）、或いは「これですね。」（確認）等、前述の疑問表現の形式をとりながら、相手から情報の供給を要求する表現ではないとみなされる表現は、本論文では疑問表現としては扱わない。

1．Yes-No疑問文の習得

①Yes-No疑問文の使用状況

調査期間後半になって、文末に「か」をつける形の疑問文だけでなく、他の形式の疑問文の使用もみられるようになった。

Yes-No疑問文の使用状況をまとめたものが次ページの［表1］である。表中の文末「か」という表記は、文末に「か」をつける形の疑問文、文末上昇調とは文末に「か」をつけず、音調だけを上げる形の疑問文のことであり、助詞で終わるものは除いている。助詞止めは、次の例のように、文を完結せず、助詞

の直後で切って音調を上げる形の疑問文のことである。

例）　あしたも↗？　日本の↗？

②文末の音調を上げる形の疑問文の使用

文末に「か」をつける形の疑問文は学習者が学習を開始した1991年８月に導入し、文末の音調を上げるだけの疑問の形（「あった↗？」「きょう↗？」等）は、92年２月に導入した。

［表１］Yes-No疑問文の使用状況

表内数字：件数

対話ﾀｽｸ 実施月	学習者Ａ			学習者Ｂ			タスク内容
	文末「か」	文末上昇調	助詞止め	文末「か」	文末上昇調	助詞止め	
91年11月	21	0	0	15	0	0	時間を聞く（空港）、買い物、場所を聞く 習慣を聞く、警察の尋問　相手を誘う
92年２月	7	1	0	5	0	3	紹介し合う、旅行の問い合わせ
92年５月	5	0	2	8	1	0	将来の夢を語る　，　家探し
92年７月	27	0	0	12	2	1	落とし物、迷子、面接試験、　初対面の会話 出迎え、人探し
92年９月	14	6	3	21	1	4	趣味を聞く、
92年10月	13	0	0	3	0	0	休みをとる、日本の感想、

［表１］からも分かるように、91年11月のタスクでは、文末に「か」をつける形以外のYes-No疑問文は現れなかった。92年２月のタスクでは、文末の音調を上げるだけの形の疑問文の使用がみられたが、「けっこんした↗？」（学習者Ａ）の一例だけであり、あとはすべて文末に「か」をつける形のものであった。この時点で、日常的に文末の音調を上げるだけの形の疑問表現に既に何度も触れていると思われるが、学習者自身の使用は全体を通しても多くはない。タスクの課題が、ごく親しい者同士の会話ではないことからこうした場面では使い

にくいことを既に意識していたのか、或いは、２月の時点では、動詞の辞書形（92年11月末に導入）がまだ十分定着していなかったことも考えられる。

文末の音調を上げる形が多くみられたのは、92年９月のタスク（日本語教師ではない一般の日本人男性に趣味について電話で尋ねるもの）であった。相手の日本人は常に「です」「ます」を使い、学習者の側も、全体的に「です」「ます」を使った発話をしていたのだが、よくわからない言葉や内容に直面すると、文末の音調を上げる形で聞き返したり、質問したりする場面がみられた。ことばよりも内容に集中していたせいであろうが、会話全体が「です」「ます」で交わされている中、突然のこの形の疑問表現の使用は違和感を感じさせた。

＜例１＞（日本人）紀行文ていうのはですね。（中略）…モンゴルの草原に行くとか。
（学習者Ａ）トラベル？　（日本人）そうです。旅をするんですよ。

＜例２＞（日本人）ホワイトウォーターにはあまり行ったことがないんです。
（学習者Ｂ）ああー、じぶんのカヌー？　（日本人）そうです。
（学習者Ｂ）ああーええと、なんねんまえにかったんですか。

③文を助詞の直後で切り、音調を上げる形の疑問表現の使用

文を完結せず、助詞の直後で切って音調を上げる形の疑問表現は授業では未導入だが、学習者Ｂは来日後約半年、学習時間80時間が経過した92年２月末タスクの中で、自分の職業を述べた後、相手に対して「あなたも？」と使用した。

学習者Ａは、来日後９ケ月、学習時間96時間が経過した５月初めの部屋探しのタスクの中で、「しょくじは？じぶんで？」という発話をした。

この時点では、「あなたも？」も「じぶんで？」も日常会話の中で定式的な表現として身に付けた可能性がある。しかし、92年９月の、電話で趣味について尋ねるタスクでは、定式的な表現としてではなく、名詞のあとに助詞がついて一塊の単位であることを意識してこの形の疑問表現を使っているように思われる。以下にその例を挙げる。

＜例１＞（日本人）…つくる会社にいたんですよ。横浜にあったんですけど。
（学習者Ｂ）ちゅうごくのまちのなかに？
（日本人）いえ、中華街の中と言うわけじゃなくて、あの横浜の…

＜例２＞（日本人）最初は海でやってたんですよ。
（学習者Ａ）にほんの？　（日本人）ええ、そうです。

＜例３＞（学習者Ａ）ほんをよむときはどこですか。
（日本人）本を読む場所ですか。
（学習者Ａ）そう。アパートで？　（日本人）え。アパートですね。

授業で使用した教科書[注4]が分かち書きになっているため、自然に文節の知識が身に付いたとも考えられるが、いずれにせよ、助詞の機能、日本語の文節を理解し始めていることの表れであると考えられる。

２．選択疑問文の習得

選択疑問文の使用は、学習者Ａが91年11月に３件、92年７月に１件、学習者Ｂが、91年11月に４件、92年７月に３件、９月に３件である。この形の疑問文は、91年10月に導入しているが、学習者Ａはその使用が少ない。

学習者Ｂの場合、学習開始後１年がたってもこの疑問文の誤用が続いている。その原因は、選択疑問文の文節数の多さ、あるいは下記の誤用例のように「か」を単純に英語の"or"のつもりで使用する英語の干渉のためとも考えられる。

＜誤用例＞

・たくさん・かすこしですか　（学習者Ａ　91年11月）
・おさけまいにちかときどきおさけのみますか　（学習者Ｂ　91年11月）
・あなたのおしがたはごごかごぜんですか　（学習者Ｂ　92年７月）
・としょかん、かしだして・か、かったほんですか（学習者Ｂ　92年９月）

３．Ｗｈ疑問文の習得

Ｗｈ疑問文の疑問詞別の使用件数をまとめたものが［表２］である。

疑問詞「いつ」は、91年12月に導入したが、学習者Ａはそれ以前の11月のタスクの中で使用を始め、その後も「いつ」を多用している。

疑問詞「どう」は、91年10月初旬に導入したが、タスクの中では学習者Ａは、

92年５月に初めて使用し、学習者Ｂは全く使用していない。また、「どのぐらい」も91年10月初旬に導入しているが、学習者Ａは92年７月に初めて使用し、導入から使用までの時間が他の疑問詞に比べて長くなっている。

また、学習者Ｂは、「なにぎんこう」「なにだいがく」「なにこうこう」といった語彙の使用が多く、「ぎんこうはどちらですか。」「ぎんこうのなまえは何ですか。」のかわりに、「なにぎんこうですか」のように少ない文節数で発話しようとする傾向にある。

［表２］Ｗｈ疑問文の使用件数

［表２－１］学習者Ａ　　表内数字：件数（空欄は０）

疑問詞 タスク実施月	何時	いつ	いくら	何	どんな	誰	どちら どこ	(選択) どちら	どう して	どの くらい	どの	どう	その他
91/11	7	1	3	5	2	1	8	1					
92/2	1	2					1	1	1				
92/5		2		1	1			2*	2			3	
92/7		1			3		5			2	1		3**
92/9				3	1		4					1	
92/10				1						1		2	
計	8	6	3	10	7	1	18	4	3	3	1	6	3

*内1件は(どっち)**内訳：(なんご)，1(なんにん)，1(なんさい)

［表２－２］学習者Ｂ　　表内数字：件数（空欄は０）

疑問詞 タスク実施月	何時	いつ	いくら	何	どんな	どれ	誰	どちら どこ	(選択) どちら	どう して	どの くらい	どの	どう	その他
91/11	8		3	3	1	2	1	11						2*
92/2			2	4				4	5	1	2			4**
92/5		1	3	2	1			1	1					
92/7	1			2	1		1	2						6***
92/9	1			3	2			4						3+
92/10	1									(なんで) 1				2++
計	11	1	8	14	5	2	2	22	6	2	2	0	0	17

*なんようび　なんじかん　**なんさい　なんぷん　なにぎんこう　***なんじかん　なんにん　なんさい　なんかげつ　なにこうこう　なんようび
+なにだいがく　なんねん　なんさつ　++なんじかん　なんにちかん

4．「～は？」の疑問表現の使用

前述した３つの疑問表現の他に、「～は？」の形の疑問表現を取り上げる。

「おくにはどちらですか。」の代わりに「おくには？」と尋ねる方法は、91年８月の学習開始当日から導入した。この形の疑問表現は、疑問詞を明確にしていないが、当然尋ねている内容は理解でき、説明を要求する疑問表現の一つと言える。この形で学習者Ａは、92年２月に「おしごとは？」（２件）、「しゅみは？」、７月には「おなまえは？」の疑問表現を使用している。学習者Ｂは、92年２月と７月に「おくには？」を使用している。

これとは別に、「～は？」の疑問表現は、文脈から問題項目が明らかなとき、「～の場合にはどうですか」といった主題を変更して質問する場合にも用いられる。この質問形態は特に授業中に指導したわけではないが、学習者はかなり早い時期から使用を始めている。その件数は下記の［表３］の通りである。

この形の疑問表現はほとんど問題なく使われている。この機能での助詞「は」の習得が、学習者Ａ、Ｂには容易であるようだ。今後も助詞機能の習得との関係で、こうした疑問文の使用に関する研究を進める必要があると考える。

［表３］「～は？」の使用件数

年/月	学習者Ａ	学習者Ｂ
91/11	0	0
91/2	1	3
92/5	4	3
92/7	4	5
92/9	3	2
92/10	0	0
計	１２	１３

A:学習者A　B:学習者B

＜使用例１＞

Ａ：にほんご　べんきょうしていますか。
Ｂ：にねんかんぐらい。
Ａ：ああ・そうですか。
Ｂ：ジョンソンさんは？　（92年２月）

＜使用例２＞

Ｂ：ペンションオーナーになろうとおもっています。（中略）
Ａ：それはよさそうですね。でもかぞくは？
Ｂ：いっしょに。
Ａ：あ、そう。・・おかねは？　（92年５月）

Ⅲ．応答表現の習得

１．Yes-No疑問文に対する応答

①応答表現の型別分類

Yes-No疑問文に対する応答に関する研究には、奥津・井上・大島・黄（1990）の中国語・朝鮮語話者を対象とした研究がある。そこでは、応答から

４つの要素を抽出し、その組み合わせにより分類する方法を取っている。本研究もYes-No疑問に対する応答表現分析のため、この分類方法を取り入れた。

分類はまず、応答表現を次のようにＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの４要素に分ける。

（例）問：学生ですか

答：はい（A）、そうです（B）。学生です（C）。○○大学で勉強しています（D）。

Ａは応答詞で、「いいえ」「いや」「うん」「ええ」等を含める。Ｂには、「そうではありません」「ちがいます」等が含まれる。Ｃは問にある形を繰り返したもの、ＤはＡ、Ｂ、Ｃ以外の応答である。学習者２名の応答をこの４要素の組み合わせによる型別に分類し、その数を集計したものが［表４］である。

［表４］Yes-No疑問に対する応答表現の型別分類

表内数字：件数（空欄は０）

	学習者Ａ								学習者Ｂ							
時期	´91	´92	´92	´92	´92	´92	計	順位	´91	´92	´92	´92	´92	´92	計	順位
型	11	2	5	7	9	10			11	2	5	7	9	10		
A	1			5	6		12	④				2	1	2	5	⑧
AB	1	1		2			4	⑦	4			6		1	11	⑥
ABC								—								—
ABCD								—								—
ABD								—		1					1	⑬
AC	5			3	1		9	⑤	10			1		2	13	⑤
ACD				1	1		2	⑪	3			1			4	⑩
AD		1		3		2	6	⑥	1		1	7	2	3	14	④
B		1	1		1		3	⑧				5	4	2	11	⑥
BC			1			1	2	⑪					2	1	3	⑫
BCD			1				1	⑬								—
BD		1		1	1		3	⑧			2	2			4	⑩
C	7	3	4	5	1		20	①	1	2	4	6	2	1	16	②
CD	1	3	5	4	1		14	②		1	2	9	1	2	15	③
D	2		4	4		4	14	②	1	4	1	7	1	3	17	①
他			1		2		3	⑧	1			2	2		5	⑧
計	17	10	17	28	14	7	93	—	21	8	10	48	15	17	119	—

［表４］の順位の欄の丸数字は各型が全体で何番目に多かったかを表している。これを見ると、学習者Ａ、Ｂ共に、上位３番目までが、Ｃ型、ＣＤ型、Ｄ型であり、いずれもＡ要素（応答詞）や、Ｂ要素（そうです）等を含まない形であることがわかる。４番目、５番目になると、応答詞を含んだＡ型、ＡＤ型になるが、学習初期に導入した「はい、そうです」（ＡＢ型）は、学習者Ａは７番目、学習者Ｂは６番目の順位で、使用が多いとは言えない結果となった。

この結果は、先の奥津らの研究結果とかなり似ている[注5]。母語が違っても初級日本語学習者に共通の応答パターンがあることを示唆していると考えられる。

②「いいえ」使用回避の傾向

［表５」は、応答詞の内容に着目し、肯定的応答、否定的応答の件数と、その中で応答詞「はい」「いいえ」を使用した応答の件数を並べたものある。ここで言う応答詞「はい」には、「ええ」「うん」、「いいえ」には「いや」「ううん」等を含んでいる。

［表５］応答詞の使用状況　　表内数字：件数　＊()内数字：英語でNoと答えたもの

	学習者Ａ						学習者Ｂ					
タスク実施月	全回答	肯定回答	はい使用	否定回答	いいえ使用	その他	全回答	肯定回答	はい使用	否定回答	いいえ使用	その他
91/11	17	9	4	8	3	0	21	15	11	6	6	0
92/2	11	8	3	3	0	0	9	7	1	2	0	0
92/5	12	6	0	4	0	2	10	8	0	2	1	0
92/7	33	30	15	3	0	0	52	35	8	12	7	5
92/9	13	8	7	3	(1)＊	2	17	8	2	5	1	4
92/10	8	4	2	1	0	3	16	10	7	2	0	4
92/11	20	15	5	4	0	1	22	17	3	1	0	0

この表からも明らかなように、学習者Ａの否定的応答内での応答詞「いいえ」の使用はほとんど無い。この「いいえ」使用回避の傾向は、92年２月の時点で既にはじまっていると考えられる。学習者Ａは母語の英語で会話するときには、当然の事ながら、"Yes" や"No"を頻繁に使用している。日本語の「いいえ」の不使用に関して本人は、意識したことはないと答えながら、日本人が「いいえ」と言うのをあまり聞いたことがなく、使い方によっては失礼になる

と思うと答えた。下記に学習者Ａの否定的応答の例を挙げる。

92年７月＜人物について＞　　問：ワトソンさんはせがたかいですか
学習者Ａ：ちがいます。せがひくいです。
問：ぼうしをかぶっていますか。
学習者Ａ：うーん。それはないとおもいます。
92年９月＜建物について＞　　問：ちいさいですか
学習者Ａ：じゃなくて　にかいがあります。

③「そうです」の誤用

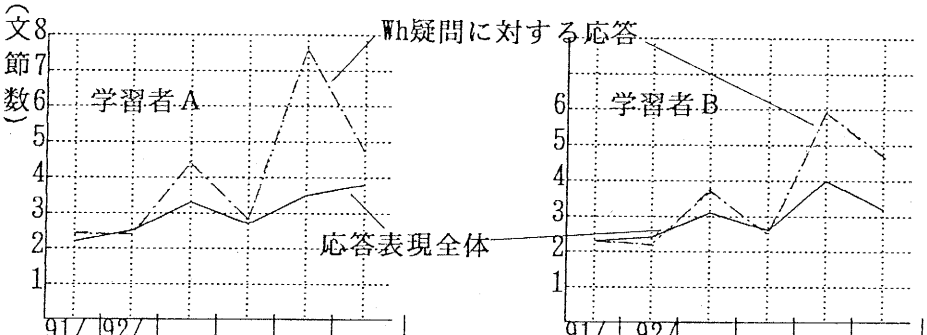
学習者Ｂの場合、「そうです」の使用に誤用がみられた。その例を挙げる。

問：スポーツをしますか———学習者Ｂ：はい、そうです。（91年11月）
問：ひらがなとカタカナはかけますか———学習者Ｂ：はい、そうです（92年７月）

91年11月の時点で、タスク終了後、誤りを指摘し、「そうです」が使えない場合について説明をしたが、その後もこうした誤用は続いている。この「そうです」の問題を学習者Ｂがいかにして克服していくのかは今後の課題である。

２．Ｗｈ疑問文に対する応答

［グラフ］応答表現の文節数の変化



文節数	91/11	92/2	5	7	9	10
応答全体	2.2	2.5	3.3	2.7	3.5	3.8
対wh疑問	2.4	2.4	4.4	2.8	7.6	4.7

文節数	91/11	92/2	5	7	9	10
応答全体	2.3	2.4	3.1	2.6	4.0	3.2
対wh疑問	2.3	2.2	3.7	2.5	5.9	4.7

前ページのグラフは応答表現の文節数の変化を表したものである．Ｗｈ疑問文に対する応答表現の文節数の伸びが、応答表現全体の文節数の伸びを上回る上昇を示しているのがわかる。Ｗｈ疑問文は相手に説明を要求するものであり、その応答の文節数の伸びは、それだけ多くの情報を伝えられるようになったことの表れである。

Ⅳ．まとめ

以上、日本語初級学習者の疑問表現と応答表現の習得過程について、主にその形態と使用状況を中心に考察した。

文末に助詞「か」を伴わない、音調を上昇させるだけの疑問文は、待遇表現の問題と関係していた。「～も↗？」「～の↗？」のように文を完結せずに途中の助詞の直後で文を切り、音調を上げる形の疑問表現は、「～は↗？」といった形の疑問表現と共に、各々の助詞の機能の理解を表出させるものであった。このように、疑問表現の習得過程は、待遇表現や助詞の習得など、様々な要素の習得過程と密接に関係していると言える。

Yes-No疑問文に対する応答表現の分類の結果、「はい」「いいえ」等の応答詞や「そうです」等を含まない形の応答が多いことが分かった。これは、先行研究の結果とかなり類似したものであったことから、母語に関係なく存在する日本語初級学習者に共通の応答パターンを暗示している。また「いいえ」の使用を回避する傾向が強いことも分かった。

疑問・応答表現は、与えられた課題やタスクの内容に左右されることが多い。従って本研究では、例えば、同一の課題に対するYes-no疑問文とＷｈ疑問文の選択の仕方の変化等、疑問表現全体、応答表現全体における使用上の変化やその傾向について結論を出すことは避けた。今後は、同一の課題に対する疑問・応答表現の変化を縦断的に研究する方法を検討したい。また、日本人の疑問表現の使用や応答パターンに関する研究との比較も行い、疑問表現、応答表現の中間言語解明に向け、研究を進めていきたい。

以　上

＜注＞

注1 「～も↗？」の↗？の表記は、？マークの直前、つまり↗のマークの部分で音調が上昇することを表す。

注2. 両名を対象とした助詞、動詞・形容詞の活用、構文の習得に関しては、久保田美子(1993)「第二言語としての日本語の縦断的研究－初級学習者を対象として－」『お茶の水女子大学平成四年度修士論文』を参照のこと。

また、その他の表現形式の習得に関しては、下記参考文献、久保田・大島(1992a)、応答までの時間に関する研究については、下記参考文献、久保田・大島(1992b)を参照のこと。

注3. 松村明編(1971)『日本文法大辞典』明治書院、
国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版

注4 使用テキストは、水谷修・水谷信子著(1977)『An Introduction to Modern Japanese』ジャパンタイムズ社

注5 奥津・井上・大島・黄(1990)参照のこと。例えば、応答の型（C、CD、D）が順位の上位を占めること等が、本研究の結果と一致している。

＜参考文献＞

奥津敬一郎(1989)「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』8月号

奥津敬一郎・井上優・大島資生・黄麗華(1990)「Yes-No疑問文に対する日本語学習者の応答－中国語・朝鮮語話者の場合／分析編－」井上和子編『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究　研究報告(6B)』文部省科学研究費特別推進研究(1)

上村隆一(1987)「Yes-No疑問文に対する応答－日英比較の立場から－」『言語学の視界　小泉保教授還暦記念論文集』大学書林 pp.309-325

久保田美子・大島弥生(1992a)「初級学習者の習得過程における諸相についての縦断調査(2)」『言語文化と日本語教育』第3号、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 pp.24-36

久保田美子・大島弥生(1992b)「日本語初級学習者の習得過程縦断調査　－格助詞「を」「に」「で」「へ」・接続表現等についての考察－」『平成4年度日本語教育学会秋季大会・予稿集』日本語教育学会 pp.31-39

斎藤里美(1989)「日本語教育における疑問文・質問文」『日本語学』8月号

仁田義雄(1987)「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界　小泉保教授還暦記念論文集』大学書林 pp.179-201

（サンシャイン外語学校）